

平成 29 年度 文部科学省委託事業
青少年教育施設を活用した国際交流事業

日タイ大学生招聘交流事業

— 学校安全と防災教育 —

International Exchange Project for Utilizing Youth Education Facilities
Invitation Program for Thai University Students to Japan 2017
- School Safety and Disaster Prevention Education -



青少年教育施設を活用した 国際交流事業

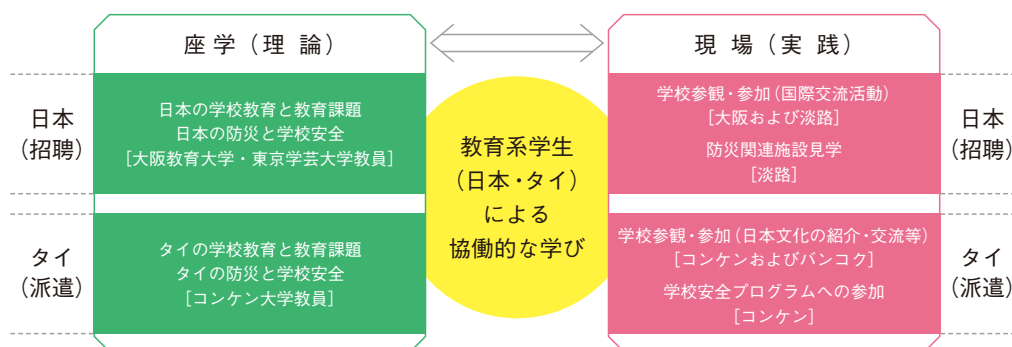
International Exchange Project for Utilizing Youth Education Facilities

▶目的

本事業は、日本(東京学芸大学・大阪教育大学)およびタイ(コンケン大学)の学生による双方の交流によって、主に教職を志望する学生たちを対象に、学校教育の具体的なテーマに関する実践的な学びを通じ、グローバル化が進む教育現場における実践的な指導力やコミュニケーション能力を育成することを目的とするものである。

▶プログラム概要

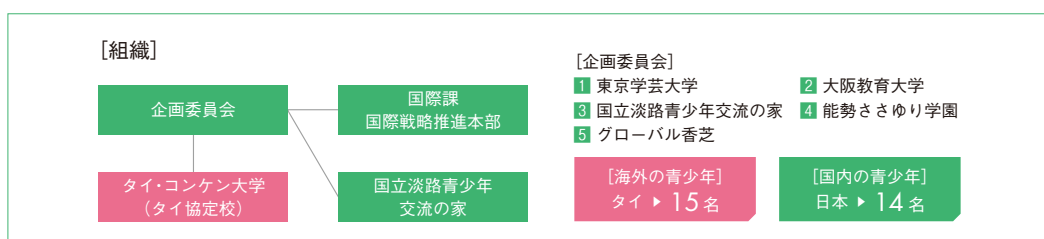
本プログラムは例年、日本・タイ両国の都市部と農村部における学校等のフィールドワークを組み合わせ、具体的なテーマに関わる実践的な学習機会を設定している。本年度は、「学校安全・防災教育」をテーマとして、都市部(大阪・バンコク)と農村部(淡路・コンケン)をフィールドに設定した。



招聘事業に関しては、タイ(コンケン大学)の学生15名と日本(東京学芸大学・大阪教育大学)の学生14名が混成のグループを組み、派遣事業に関しては日本の学生14名(東京学芸大学11名・大阪教育大学3名、委託費12名・大学負担2名)が、招聘事業に参加したコンケン大学生15名らとともにプログラムを実施している。こうしたグループワークを通じ、双方の学生が母語ではない英語を用いてコミュニケーションする機会を設定している。

招聘事業と派遣事業は対をなしており[上図参照]、①日タイ双方の大学教員による「学校教育・教育課題」関連、および本年度のテーマであるところの「防災・学校安全」関連の講義、②日タイ双方の複数のタイプの学校参観および教育参加(それぞれの学校における国際理解教育や防災教育プログラムに関わる学生グループのプレゼンテーション等)、③日タイ両国の文化体験、をそれぞれに配している。このような形をとることで、日タイ両国の学生たちが具体的な教育課題や、背景をなす文化の理解と併せ、両国の教育についての構造的な視野を養うとともに、日タイ双方の児童・生徒たちにおけるグローバルな視野の育成にも寄与できるものとなっている。

▶運営組織



日タイ大学生招聘交流事業

— 学校安全と防災教育 —

平成29年9月3日～9月9日に招聘プログラムを実施した。日タイの学生計29名を6グループに分け(日タイ混成)、かつらぎの森及び国立淡路青少年交流の家に滞在しながら、学校安全および防災に関する実践的な協働学習を行い、最終日に総括発表を行った。活動内容は以下のとおり。



1日目 9月3日(日) 【オリエンテーション】

- ▶ 来日(コンケン→バンコク・スワンナブーム空港→関西国際空港)
- ▶ オリエンテーション

宿泊先

まなびやの森

2日目 9月4日(月) 【講義・日本文化体験】

- ▶ 大阪教育大学キャンパス・ツアー
- ▶ 講義「日本の学校教育と教師」
(東京学芸大学 岩田康之教授)
- ▶ 講義「地盤と自然災害」
(大阪教育大学 菅野耕三名誉教授)
- ▶ 日本文化体験(餅つき／グローバル香芝)
- ▶ ウェルカム・パーティ



まなびやの森

3日目 9月5日(火) 【大阪近郊 学校訪問・交流活動】

- ▶ 能勢ささゆり学園(能勢小学校・能勢中学校)訪問
学校見学・交流活動
- ▶ 大阪市内自主研修

まなびやの森

4日目 9月6日(水) 【学校安全に関する学習】

- ▶ 大阪教育大学附属学校危機メンタルサポートセンター訪問
講義「日本の学校安全」(大阪教育大学 藤田大輔教授・センター長)
大阪教育大学附属池田小学校見学
- ▶ 淡路島へ移動
- ▶ オリエンテーション

国立淡路青少年交流の家

5日目 9月7日(木) 【淡路島内学校訪問・防災関連施設見学】

- ▶ 淡路市立北淡小学校訪問 学校参観・文化交流活動
- ▶ 北淡町震災記念公園・野島断層保存館訪問 震災遺構等見学

国立淡路青少年交流の家

6日目 9月8日(金) 【日本文化体験・施設見学】

- ▶ 大鳴門橋(渦潮見学)
- ▶ 日本文化体験(茶道)

国立淡路青少年交流の家

7日目 9月9日(土) 【総括発表・帰国】

- ▶ 総括発表会(各グループ)
- ▶ 関西国際空港より離日(バンコク・スワンナブーム空港→コンケン)

研修内容

主なプログラム内容

講義

「学校教育」については、プログラム2日目の午前に東京学芸大学の岩田康之教授が「日本の学校教育と教師」に関する講義を行った。日本の教師教育や学校教育の制度について、タイの教育システムと比較しながらの講話で、教員免許の種類、教育実習期間の違いなどを学び、また、日本の教育課題とその背景についての知見を得た。

「防災教育」については、プログラム2日目の午後に大阪教育大学の菅野耕三名誉教授が「地盤と自然災害」に関する講義を行った。地球の地盤構造の概要、阪神・淡路大震災を中心に地殻変動・地盤沈下・地すべり・都市部の洪水発生システムなどの知識を深めた。

「学校安全」については、プログラム4日目に大阪教育大学附属池田小学校にて藤田大輔大阪教育大学教授の「学校安全に関する講義」を受講し、同校の安全管理システムや教員・保護者の高い防犯意識を学んだ。

日本文化体験

プログラム2日目に、グローバル香芝（香芝市国際交流市民の会）の協力を得て大阪教育大学構内で餅つきを体験した。タイ人・日本人学生双方にとって実践的な理解を深める契機となった。また、プログラム6日目の午後に国立淡路青少年交流の家の研修指導員から茶道の指導を受け、日本の「わびさび」の文化に触れた。タイ人通訳が日本の大学で茶道部の経験があるなどの幸運にも恵まれ、特にタイ人学生にとって有益な体験となった。



防災関連施設の見学

北淡震災記念公園・野島断層保存館では、阪神・淡路大震災の遺構を、菅野耕三名誉教授の解説とともに参観し、また実際に「震度7」の体験をするなどの活動を通じて防災意識を高めた。

学校訪問

3日目に能勢町立能勢ささゆり学園（小学校、中学校／大阪近郊）、4日目に大阪教育大学附属池田小学校（市街地）、5日目に淡路市立北淡小学校（島嶼部）を訪問した。タイプの違うそれぞれの学校の教育事情（地域連携、防災教育等を含む）を実践的に学ぶ機会となった。

成果と考察

- ▶ 学校教育については、講義と学校訪問により人口減少が続く地方の教育課題を確認（見つける）することができた。2校の学校給食の提供により「同じものを食べる学校給食は教育の一部」と改めて気づいた日本人学生もいた。
- ▶ 学校安全は、3校を訪問し大学教員による講義、学校教員による説明、施設見学が地域社会との連携の大切さや防犯意識を持つことの重要性を認識させた。タイ人学生は訪問した学校の安全管理システムに驚嘆していた。日本人学生は学校教員の安全管理に対する膨大な仕事量に気づくと同時にその訓練の重要性を再認識した。
- ▶ 防災教育については、日タイ両国の状況に差異があるが、施設見学や講話等を通じて防災の意識を高く保ち、また地域との連携した防災教育も重要性を自覚した。
- ▶ タイ人と日本人とのコミュニケーションについては、英語やボディランゲージで問題なく深化したが、訪問小学校の児童とタイ人との交流に関わることの難しさに気付いた日本人学生がいた。また、児童との交流はタイ人学生にとっては国際理解の動機付けとなった。

学生による班別総括発表会

9月9日 国立淡路青少年交流の家

ありがとうございました。大丈夫です。



GROUP 1

テーマ 「日本とタイの学校安全の比較」

プログラムにおいて学んだことを踏まえながら、日本とタイの学校安全を比較した。お互いの国の学校安全について学ぶだけでなく、プログラムでの新たな学びを吸収する必要があり大変なこともあったが、今回のテーマである学校安全に対する理解をより深めることができた。



GROUP 2

テーマ 「日本とタイにおける学校安全」 (School Safety in Thai and Japan)

タイと日本の学生が両国の学校文化や日常の習慣を比較しながら、学校において子どもたちがどのように生活しているのか考え、ほかの班とは異なった演劇方式で工夫して分かりやすいように発表した。学校のあらゆる側面(宗教的観念、登校方法など)の両国の違いを発表において発見することができた。



GROUP 3

テーマ 「小学校の日タイ比較」

小学生の一日の生活から、給食、校則、学校安全、児童の保護といった分野についての比較をした。情報提供をするにあたり、さまざまなエピソードを語り合った。そのなかで気づいたことは文化やルール、システムの違いはあれ、タイ人でも日本人でも子どもは基本的に何も変わらないということだった。



GROUP 4

テーマ 「日本とタイの学校における違い」

タイ学生が日本の小学校を見学した際に感じたことを中心して、日本とタイの学校の違いについて発表した。5つのスモールピック(学校安全、法律やルール、金銭・食べ物、清掃、教材)に基づき、一人ひとつのスモールピックを担当した。

学生による班別総括発表会 9月9日 国立淡路青少年交流の家



テーマ 「タイと日本の学校安全の違い」

生活安全、交通安全、防災ごとにタイと日本の取り組みをまとめ、それぞれの国の優れている点と改善できる点について考えた。その結果、生活安全と交通安全の取り組みにはタイと日本には大きな差はないが、防災教育には差があることが分かった。タイと比較することで日本の課題についてより具体的に考える機会となった。



テーマ 「日本とタイのお米の違いについて」

私たちは、メンバーの1人が農業専攻であることや、本プログラムの移動中に水田を見る機会が多くタイの学生が日本の稲作に興味を持ったこと、日本とタイで食べられているお米に違いがあることから、日本とタイのお米の違いをテーマとした。①稲作の方法、②お米の種類、③お米を使ったもの、④お米の文化について発表した。

参加者の成果

日本人参加者

「コミュニケーション能力の昇上、
言語の伝わらない時の
コミュニケーション方法を学んだので、
今後活かしたいです。」

「私たちは、もうタイのニュースを聞いても
他人事には思えなくなると思います。
その関心ごとが日本とタイをつなぐ第一歩になったと思います。」

「多様性を認められるような、
広い視野を持って考えられる教師となる。」

「自国と異国の文化や歴史の違いを知り、
互いに尊重しあうよう、
今回の経験を活かしたい。」



「私は安全を他の人に教えるだろう。」

「どのような教師になるのか、
このプログラムは
私を助けてくれた。」

「(茶道)とても興奮した。」

「私の国は安全と思いやりのある学校を持つべきだ。」

「私は学校安全システムの
リーダーになります。
私が教師であれば生徒に
安全と実践を学習させます。」

タイ人参加者

派遣事業

平成29年11月26日～平成29年12月3日に派遣プログラムを実施した。東京学芸大学及び大阪教育大学の学生ら14名（うち2名の経費は東京学芸大学負担）がコンケン及びバンコクを訪問し、プログラムに参加した。またこれに加えてTV会議システムで東京－大阪をつなぎ、4回の事前指導と1回の事後指導を行っている。プログラムは以下のとおり。

KHON KAEN
THAILAND
BANGKOK

事前指導 10月20日(金) 11月10日(金) 11月17日(金) 11月24日(金)

- ▶ タイの学校教育と教師について(文献購読) ▶ 日本人学校について ▶ グループワークの準備 ▶ タイ渡航に関するガイダンス 等

1日目	11月26日(日) 【出発日】	宿泊先
▶ 離日(羽田→バンコク・スワンナプーム空港乗継→コンケン) ▶ 現地オリエンテーション		Kwanmor Hotel Khon Kaen University
2日目	11月27日(日) 【コンケン近郊学校訪問】	
▶ Ban Bueng Nium Bung Kri Noon Tha Hin School 訪問 授業参観・文化交流等 ▶ コンケン大学主催ウェルカムパーティー(文化交流)		Kwanmor Hotel Khon Kaen University
		
3日目	11月28日(月) 【タイの自然災害に関する体験学習・学校安全プログラム等見学】	
▶ タコンケン大学工学部訪問 講義「タイ東北部の自然災害と防災」(Rungroj ARIWECH 工学部講師) フィールド・トリップ(コンケン市内の土壌観察) ▶ コンケン大学附属中学校訪問 防災教育に関するプレゼン、学校安全プログラムの見学・参加 ▶ コンケン大学附属自閉症インクルーシブ教育開発センター見学 ▶ コンケン夜市(ナイトマーケット)見学		Kwanmor Hotel Khon Kaen University
4日目	11月29日(火) 【コンケン大学訪問】	
▶ コンケン大学教育学部訪問 講義「タイの学校教育と授業研究」(Maitree INPRASITA 教育学部長) ▶ 空路バンコクへ移動		CU iHouse
5日目	11月30日(水) 【バンコク市内学校訪問】	
▶ チュラロンコン大学附属小学校訪問 朝の集い見学 学校の紹介 校内見学・授業参観(Kriangkrai INTHARACHAI 教頭ほか) 児童との交流(2年生児童対象に日本人学生が折り紙を指導) ▶ 泰日協会学校(バンコク日本人学校)訪問 学校の紹介(室賀薫校長ほか) 校内見学・授業参観		CU iHouse
6日目	12月1日(木) 【バンコク市内学校訪問】	
▶ サムソムスクール(私立幼稚園・小学校)訪問 学校の紹介(Sangsom REUTRAKUL 校長) 校内見学・授業参観 児童との交流(給食) 行事への参加(4～6年生児童対象に日本人学生が日本文化を紹介) ▶ 自主研修事前レポート作成・提出		CU iHouse
7日目	12月2日(金) 【自主研修】	
▶ バンコク市内および近郊の文化施設等		CU iHouse
8日目	12月3日(土) 【帰国日】	
▶ ミーティング(自主研修の省察等) ▶ 離泰(バンコク・スワンナプーム空港→羽田)		

事後指導 1月26日(金)

- ▶ 派遣事業の活動報告 ▶ プログラム全体の省察等

研修内容

主なプログラム内容

講義・フィールドトリップ

プログラム3日目に、Rungroj Arjwech コンケン大学工学部講師による「タイ東北部における自然災害と防災」に関する講義を受講し、水害・塩害について学ぶとともに、同講師とともに実際にコンケン大学キャンパス内の土壌の実踏を行った。これは日本とは異なるタイの自然環境と防災意識のありようをとらえる上で、特に日本人学生にとって有益な機会となった。

翌5日目は、Maitree Imprasita 教育学部長の「タイの学校教育と授業研究」に関する講義を受講し、日本流の「授業研究」のタイでの展開について学ぶ機会を得た。

現地学校の児童との交流

タイ滞在中に5校を訪問し、うち現地校4校で児童生徒たちとの交流の機会を得た。

2日目に訪問したBan Bueng Nium Bung Kri Noon Tha Hin School (コンケン近郊)では児童たちとの文化交流の時間を持ち、3日目にはコンケン大学附属中学校で日本の防災教育を紹介するとともに同校の生徒対象の防災教育プログラムに参加した。バンコクに移動した後、5日目にはチュラロンコン大学附属小学校では2年生児童を対象に折り紙のワークショップを行い、翌6日目には Sangsom School (バンコク郊外・私立校)において高学年児童を対象に日本文化(祭り)を紹介し阿波踊りを児童とともに踊ることとなった。また、5日目午後には、バンコク日本人学校を訪問し、同校の運営の仕方やカリキュラムなどについて学び、授業参観の機会を得た。

タイ国の地域文化に関する学び

3日目にコンケン大学附属の自閉症インクルーシブ教育研究開発センターを見学し、日本とは異なるタイの特別支援教育の状況に触れる機会を得た。また、コンケンのナイトマーケットを訪れ、タイの地方の商業文化に触れる機会を設けた。バンコクにおいては、7日目に自主研修日を設定し、学生個々の関心に合わせてタイ文化(寺院や市場など)に実際に触れる機会とした。

事前・事後指導

事前指導(派遣前に4回)においては、タイの教育事情やタイにおける日本人学校の状況等、訪問先に関わる文献(日本語・英語)を購読した。また事後指導(1回)においては、主に現地校での児童生徒たちとの交流を中心に、グループごとに振り返りを行っている。

成果と考察

- ▶ 学校教育については、タイプの異なる現地校4校を訪問する中で、タイにおける教育の地域差や、外国語教育への取り組みの状況等を実践的に学ぶ機会となった。またこれに先立つ事前指導と現地での講義により、重層的な理解をはぐくむことができた。現地校の児童生徒等との交流については、日本人学生をグループに分けてそれぞれ準備の上で臨み、好評を得た。
- ▶ 防災と学校安全については、大学教員による講義に加えてフィールドトリップを行い、中学校における安全教育プログラムに実際に参加する機会を経て、理解を深めることができた。

企画委員会による 事業の質向上に向けた取り組み

本事業の派遣プログラム及び事前・事後指導については、昨年度より東京学芸大学において「グローバル教育演習（タイ）」（岩田康之教授担当：2単位）として教育学部のカリキュラム内に位置づけているが、今年度より大阪教育大学においても「海外文化研究（タイ）」（城地茂教授担当：2単位）の授業として設定している。

招聘プログラムの日本文化体験は、昨年度は「茶道」一つの体験であった。今年度は、大阪では連携推進協議会の構成員である香芝市国際交流市民の会（グローバル香芝）の協力を得て「餅つき」、淡路島では国立淡路青少年交流の家の指導員を講師として「茶道」の二つの日本文化を体験した。

大阪府豊能郡能勢町の能勢ささゆり学園（連携推進協議会構成員）の協力で能勢小学校の児童、能勢中学校の生徒とタイ人・日本人学生が交流する機会を設け学生によるタイ文化の紹介、児童によるタイ人学生への日本文化（けん玉、コマ回し、めんこなど）の紹介を行った。

派遣プログラム参加学生14名（うち2名の経費は東京学芸大学負担）のうち12名が女子学生であるという事情に配慮し、引率スタッフに女性2名（経費は東京学芸大学負担）を配した。

今後の課題

課題1

東京学芸大学・大阪教育大学・コンケン大学の3大学の学生の双方向の交流の場を設定し、学校教育に関する具体的なトピックを実践的に学ぶとともに、日タイ両国の（それぞれタイプの異なる複数の）学校を訪問し、児童生徒等との交流の機会を設定し、グループごとの協働学習を行うというスタイルは、4回目を迎え、一定程度定着してきたものとみられる。今後は、財政面を含め、安定的な運営のための体制作りが課題となろう。

課題2

テーマと時期の設定については、毎年度の協議により定めているが、今年度は招聘プログラムを9月上旬に設定することとなった。これは東京学芸大学・大阪教育大学においてはともに教育実習期間中にあたり、教員養成課程の3年生・4年生の参加が難しくなった。また、派遣プログラムを11月下旬～12月上旬に設定したが、この時期はコンケン大学の試験期間と一部重なっており、タイ人学生の参加が困難となった（こうしたこともあって、派遣プログラムにおけるグループワークは日本人学生を主に組織し、タイ人学生は可能な範囲で参加、という形を採った）。双方の学年暦や訪問先の状況を踏まえてのスケジュール設定であるが、今後の円滑な実施に向けての課題を残している。

課題3

参加学生について、東京学芸大学・大阪教育大学・コンケン大学それぞれに募集・選考を行っている。今回の日本からの派遣学生に関しては学部1年から修士2年の6学年に及び、また教員養成課程の学生と非教員養成課程学生とが混在する形となった。これは、多様な学生がともに学ぶ機会を提供する点ではメリットを持つが、半面、グループワークの展開やその指導などにおいて課題を残している。

課題4

招聘プログラム・派遣プログラムともそれぞれ複数の、タイプの異なる学校参観と交流活動を設定し、また関連する講義や施設見学等の機会も設定した。これは参加学生の学びの充実につながっているが、移動も含めると過密気味のスケジュールとなり、学生の健康面でのダメージが懸念される。

課題5

今回は、招聘プログラムの全体部分においては日本語－タイ語の通訳を配し、派遣プログラムについては通訳の配置を行っていない。学生たち相互のコミュニケーションも含め、主に英語で行うことで大きな問題は生じていないが、一部の講義や説明等の理解において、通訳の配置が望ましいと思われる場面もあった。予算面の問題も含め、今後に検討が必要であろう。

調査について

日本人参加大学生14名、招聘タイ人大学生15名に対して、以下質問項目を利用し調査を行った。参加者に対しては、事業開始時及び事業終了時に同じ調査項目を用いて調査を実施した。集計・分析では、各得点の平均と標準偏差を算出した。また、参加者の事業前・後の結果の差を見るため、「対応あるサンプルのt検定」で分析した。

- 要素Ⅰ 語学力・コミュニケーション力・指導力・協調性・責任感
- 要素Ⅱ チャレンジ精神・自主性
- 要素Ⅲ 異文化理解・自文化理解
- 要素Ⅳ 教員関係(教員への志望、目的の明確化)
- 要素Ⅴ 課題達成力・集団維持機能・情報管理機能

	要素	質問項目
1	要素Ⅰ 語学力・コミュニケーション力・指導力・協調性・責任感	自国語以外で自己紹介ができる
2		外国人に自国語以外で話しかけることができる
3		将来海外の学校で学びたい
4		将来海外で働きたい
5		誰にでも話しかけることができる
6		人の話しをきちんと聞くことができる
7		人のために何かをしてあげるのが好きだ
8		人の心の痛みがわかる
9		児童・生徒が望んでいることを理解できる
10		児童・生徒と会話をすることができる
11		教師の仕事や役割を把握している
12		学校行事に積極的に参加することができる
13		誰とでも仲良くできる
14		その場にふさわしい行動ができる
15		自分勝手なわがままを言わない
16		チームで作業ができる
17		嫌がらずに、よく働く
18		自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる
19		自分がすべき役割をはっきりわかっている

20	要素Ⅱ チャレンジ精神・自主性	日本人(タイ人)として世界に貢献したい
21		小さな失敗を恐れない
22		うまくいくように工夫することができる
23		新しいことに挑戦したい
24		ゼロから企画し実行できる
25		自分から進んで何でもやる
26		前向きに、物事を考えられる
27		先を見通して、自分で計画が立てられる
28		わからないことは自分で調べることができる

	要素	質問項目
29	要素Ⅲ 異文化理解・自文化理解	交流国の文化(日常生活等)を理解している
30		交流国の歴史を理解している
31		初めての環境に自分から馴染もうと努力する
32		言語教育と異文化理解の関係を考えられる
33		自国文化(日常生活等)を説明することができる
34		自国の歴史を説明することができる
35		自国の良さを説明できる
36		自国の芸術やスポーツに興味をもっている

37	要素Ⅳ 教員志望・目的の明確化	教えることにやりがいを感じる
38		理想の教師像をもっている
39		専門教科を深めたい
40		子どもとともに成長したい

41	要素Ⅴ 課題達成力・集団維持機能・情報管理機能	物事をいろいろな方向から見るができる
42		すすんで手助けや勉強をすることができる
43		危ないことを予測して避けることができる
44		反省したことを次の行動や活動に活かしている
45		全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる
46		ルールや約束を必ず守ることができる
47		規則に従うことができる
48		困っている友達がいたら励ますことができる
49		必要情報を適切な情報源から得ることができる
50		様々な情報を取捨選択し編集することができる
51		自分の持つ情報を適切に周りと共有できる
52		情報処理能力の向上に努めることができる

外向き志向	日本人として世界に貢献したい
	外国の人との交流から自分の可能性を広げたい
	交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい

調査結果

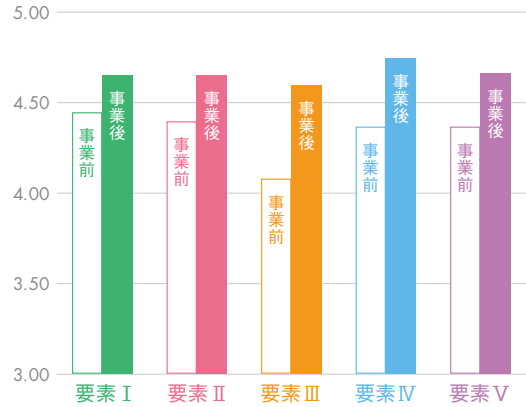
1 招聘者に対する調査

招聘者 各要素の変化

	事業前	事業後	変化		ポイント
要素Ⅰ	4.46	4.66	+0.20	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅱ	4.41	4.66	+0.25	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅲ	4.08	4.59	+0.51	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅳ	4.38	4.77	+0.39	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅴ	4.37	4.68	+0.31	*	平均値が向上(有意な差)

* $p < 0.05$

招聘者 平均点の変化



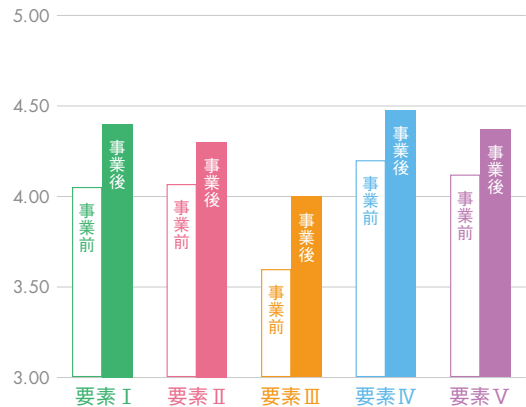
2 日本人に対する調査

日本人 各要素の変化

	事業前	事業後	変化		ポイント
要素Ⅰ	4.05	4.40	+0.35	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅱ	4.07	4.30	+0.23	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅲ	3.59	4.01	+0.42	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅳ	4.20	4.48	+0.28	*	平均値が向上(有意な差)
要素Ⅴ	4.12	4.38	+0.26	*	平均値が向上(有意な差)

* $p < 0.05$

日本人 平均点の変化



解説

タイ人学生及び日本人学生に対する調査では、要素Ⅰ～Ⅴすべてにおいて得点の向上が見られた。日タイ学生双方で最も平均値が向上したのは、要素Ⅲ「異文化理解・自文化理解」であった。多様な背景を持つ者が一週間衣食住を共にすることにより、お互いの文化理解が深まったことがわかる。また、自国の文化・歴史を再確認する機会となったこともわかる。要素Ⅳについては、タイ人学生の平均値の向上が大きかった。施設見学や講話を通じて理想とする学校をイメージし、自ら描く教師像につながったようである。



[実施主体]

東京学芸大学 国際戦略推進本部



国立大学法人

東京学芸大学